



この牛の絵はなんだろう

目野高校の「お宝」に迫る

第1回レポーター 岡村有希さん

目野高校は、1905年の裁縫学校創立以来106年を迎える歴史の古い学校である。さまざまな歴史を経て、すぐれた人々を世に送り出し、橋本忠太郎博士ゆかりのメタセコイアなど、由緒あるものも少なくない。

しかし、在校生や地域の人々にも知られないまま、あるいは誤解されて、眠っているものも少なくない。そういう、いわば目野高校の「お宝」に光を当ててみたい。

そのためには「お宝」をよく知っておられる同窓の諸先輩方からいろいろな情報をお寄せいただき、「お宝の真相に迫る」——そのような連載企画にしたい。

第1回は、左の牛の絵を取り上げてみたい。

写真下・伊藤氏(左)から話を聞く岡村さん

溪泉会館の牛 (インターネットサイト「江州怪道まっくら」旧版より)

目野高校敷地内の溪泉会館は、よくクラブ活動の合宿にも利用されているが、非常に気味の悪い絵画が飾ってある。巨大な牛と、その傍らに横たわる妙に蒼白い子供。絵の意味は不明だが、どうやら「牛の首」という非常に恐い話に関係があるらしい。「牛の首」とは今から25年ほど前に当高校の数学教師だけが全てを知っていた怪談。当時先生は生徒を数名ワゴン車に乗せて、移動中に恐い話をしていた時のことである。さんざん恐い話を聞かされたあげく、最後にとっておきの「牛の首」という話をはじめた。しばらく静かに聞いていた生徒達も次第に恐怖が限界に達し、「先生！もうやめて!!」と耳を塞ぎながら各々が叫びはじめたが、先生は面白がって生徒の訴えを無視し、夢中になって話し続けた。そして、ふと車内が静かになっているのに気が付き、後ろを振り返ると生徒全員が口からアワを噴いて失神していたのだ。あまりの恐怖に気を失ったらしい。それ以来この先生は二度と、この「牛の首」の話の口をださなくなった。(以下略)

恐怖 (筒井康隆著「狂気の沙汰も金次第」1973、サンケイ出版刊より一部抜粋)

「牛の首」という、怪談があるのだそうだ。
恐ろしい怪談であって、おそらく今までの怪談など足もとにも及ばぬほどの怖さであって、日本一、世界一の怪談だという。
どれくらい怖いかというと、この「牛の首」という怪談を聞いた人は、あまりの恐ろしさに発狂し、うわごとを言い、病気になる、そしてついには死んでしまうという。まあ、それくらい怖い話なのである。
したがって、この「牛の首」という話はひとに聞かせることができず、また、知っている人もいないというわけである。



この絵に見覚えのある同窓生はどれくらいいるだろうか。
寝そべった二頭の牛の間に少年が横たわっている。牛は真っ黒の和牛、少年の顔は月明かりを浴びて蒼白だ。
昨年度三年生の岡村有希さん(現・京都精華大学文学部一年)は、総合セミナーの卒業レポートに「目野高校の七不思議」を取り上げた。「七不思議」の一つがこの「溪泉会館の牛の絵」になっている。
溪泉会館は一九六五年(昭和40年)に図書館として竣工されたが、のち同窓会館としてクラブの合宿などに利用されていた建物。老朽化し、石楠会館が建てられてからは吹奏楽部の練習などに使われているだけである。
岡村さんは、指導担当の嶋瀬先生らとまずその絵を見とめることにした。ふだん使われていない一室に、大きな箱に入れて保管されていた。確かに不気味な絵だ。全体が暗い。寝ている

子どもの顔が妙に蒼白くて、死人のようだ。インターネットの記事(※別掲)が頭をよぎる。でも、そう思うから不気味なのかもしれない。牛のそばで子どもと一緒に寝ている場面を写真したと見る方が自然かもしれない——とも。
それから岡村さんはこの絵について調べた。タテ一七四センチ、ヨコ九三センチの二曲屏風に描かれた日本画で、作者の銘やサインはない。表装を見ると、そんなに古くはないようだ。作者はだれだろう——美術の先生や本校に古くからおられた先生、退職された先生などに尋ねてみて、おおむね判明した。
以前本校に在職された何人かの先生方から、その絵の作者は新納榮(にいろ・さかえ)先生ではないかという回答を得た。
新納先生は女学校時代の一九三三(昭和8)年から(戦争中の一時期を除いて)一九六六(昭和41)年まで長く在職された美術の先生で、退職後は関東に住まわれたが、すでに故人である。

一方、インターネットサイト「江州怪道まっくら」——滋賀県心霊スポットサイト地域別怪道・日野町」の管理者で、グラフィックデザイナー・龍谷大学非常勤講師のトータム伊藤氏も本校同窓生(一九九二年)であることがわかった。氏自身もこの絵を見たことがあり、聞き取った内容を掲載された、とのことであった。
氏はサイト管理者ということもあって、ニユーソースは隠しておられるが、この話自体は小松左京「くだんのはは」、筒井康隆「狂気の沙汰も金次第」などに紹介されているもので、それが都市伝説になって溪泉会館の牛の絵とどこかでつながったのだろうと推測しておられる。サイト上でも氏自身、(この絵と話の関連は)信憑性には欠けるが……と発言しておられる。
新納先生は、同窓生や元同僚のみなさんの証言によると、東京高等師範学校を卒業、日本画が専門だが、書道や硬筆習字も担当され、柔和な方ながら、教務・生徒指導・PTAなど学校運営にも欠かせない存在であったという。恩師であり、同僚でもあったという竹村はるさんは、先生はよく山本の種畜場(現在の畜産技術センター)へも行っておられたので、種畜場の夜の光景かとも言われる。
また、この絵は昭和30年代には校長室の壁に掛けられていたと多くの方が証言しておられ、その後溪泉会館に掲げられ、いつからか掲揚されずに保管されてしまったようだ。

岡村さんは伝説や怪談が好きで、柳田國男もよく読むという。現代における都市伝説の発生や伝播について研究できれば、とも考えている。
同窓生の皆さんで、この絵や「牛の首」伝承について何かご存じのことがあれば、事務局までお知らせください。

取材協力者(敬称略・順不同)

杉岡武久、尾庭茂隆、奥村實、北村賢、西川一雄、西沢敬治、竹村はる、トータム伊藤
(構成・文責・加藤和彦)